

学園モニュメントと学園章

学園モニュメント



学園章に「まがたま」が採用されています。その原形は、動物の牙の基部に孔をあけたものといわれ、弧状にまげられた玉です。古く『日本書紀』、『古事記』に見え、基部の孔をひもで貫き、古墳時代には装身用として使用され、また、副葬品にも供せられました。ガラス製や土製、石製のものがありますが、材料はほとんどが硬玉です。

我が学園の郷土、柏原市の大泉（おおがた）遺跡や、北玉山古墳からも発見されており、我が学園の法人名、玉手山は、古墳出土中の「玉」が出る山として名づけられた地名に由来します。本学園は、このように遺跡に囲まれた古い歴史的風土のうえに建ち、建学の精神「感恩」と共に、本学園に学ぶ者の人格の高揚と幸福を願うものであります。「まがたま」の頭部のまるみは人に対する思いやりの心を、尖部は自己に対する厳しさを、その美しい光沢は女性らしい気品を象徴するものとして、図案化し、学園章とされました。（本稿の一部は末永雅雄氏の所説に拠る。）

学園章

大倉 治氏作

A) 正門前勾玉橋の欄干にある《球形の彫刻》

母胎内の胎児が行う運動である胎動、また新しい物事が旧来のものを突き破って生じようとする動きが感じられる胎動を形として表現したものである。

将来母となる人達が学ぶ学園の入り口に据えるモニュメントとして、新しい生命の成長の証である胎動と、学園という機関で自分自身が成長してゆく過程でもある胎動を表現している。そこでは、細胞である個人を包含するクラスや同窓は一種の器官とも言え、その中で親しみあい、競い合い、時に争いながら、共に成長する集団は一つの生き物として胎動する。

B) 川縁、道路脇の〈彫刻〉

世界的に急激な発達と変化の此の時代は、人種、民族、宗教、経済、人類文化は、激しい成長と歪みと苦痛の中にいる。これも人類としての胎動であり、世界人という生物の成長のエネルギーであり、生氣でもある。人類と言いつつ一つの巨大生物としての成長そのものの有り様をこの彫刻は表現している。



A) 正門前勾玉橋の欄干にある《球形の彫刻》



B) 川縁、道路脇の〈彫刻〉